

教育のゴールと方向性をいかにして共有するか：
特別支援教育における一実践を通しての検討

平成 27 年度第 1 回帝塚山大学人間環境科学研究所シンポジウム報告

人間環境科学研究所長 柳 元和

平成 27 年度第 1 回人間環境科学研究所シンポジウムを 8 月 31 日に帝塚山大学 奈良・学園前キャンパスで開催した。以下はその記録である。

開会にあたり柳から本シンポジウムを企画した経緯等を説明した。(以下説明)

大学全入時代の到来を受けて、私立大学の社会的役割を見直す作業が迫られています。大学の値打ちを測るものは一体何でしょうか。偏差値、○○競技会での活躍、○○試験合格、就職率など枚挙にいとまがありません。ここではキャリア教育の意味について触れておきます。

法政大学キャリアデザイン学部 児美川孝一郎氏が『まず教育論から変えよう』の中に述べられているように、進路指導とキャリア教育は違います。「人生の諸ステージにおいて、自分たちが突き当たる可能性が高まっている課題やリスクについて、じゅうぶんには学習していない」ことに気づかせ援助することにキャリア教育の真髓があるのです。

また慶應義塾大学 総合政策学部 中室牧子氏が『学力の経済学』の中で述べられているように、教育の効果を測る試みが始まっています。「経済学者は、教育の因果効果を明らかにするために、実験をおこないます」が、これにはランダム化比較試験と呼ばれる手法を用います。そして「小さく始めて大きく育てる」ことを目指すのです。

さて臨床医学の現場においては「患者の訴えから出発」することが基本とされています。患者中心主義とも呼ばれます。そして患者とのやりとりは全てカルテに記録されて行き、チームで共有されます。治療とは、患者の主訴を解決するための総合的アプローチと言うこともできます。では教育現場ではどうでしょうか。「学生の訴えから出発」しているでしょうか。カルテはありますか。それはチームでの教育に活用されていますか？

平成 27 年度第 1 回帝塚山大学人間環境科学研究所シンポジウム

**教育のゴールと方向性をいかにして共有するか：
特別支援教育における一実践を通しての検討**

平成 27 年度第 1 回人間環境科学研究所シンポジウムを開催します。
今回は特別支援学校における児童・生徒の活性化に成功した事例報告を中心に議論を深めます。
最近注目されているアクティブ・ラーニングに興味をお持ちの方々、教育の今後の方向性について
関心のある方々の参加をお待ちしています。

2015年 8月31日(月)

場所： 帝塚山大学 奈良・学園前キャンパス 16号館9階 16904教室
(近鉄奈良線「学園前」駅から徒歩2分)

プログラム：

15:30 受付開始
16:00 開会

- ・「ごあいさつ：シンポジウム開催の経緯」
柳 元和 氏 (帝塚山大学 人間環境科学研究所長)
- ・「コーディネータとして：特別支援教育×ICTをめざして」
西嶋 律子 氏 (畿央大学 教育学部 教授)
- ・「現場教諭として：児童・生徒の活性化は、どのように実現されたか」
高橋 浩 氏 (奈良県立奈良養護学校 教諭)
- ・「機器開発担当として：肢体不自由のある児童・生徒に寄り添うICT」
森石 峰一 氏 (大阪電気通信大学 人間科学センター 准教授)
- ・「データベース担当者として：「暗黙知から形式知へ」、日本中での共有化への野望」
太田 和志 氏 (東大阪大学 情報教育センター長 准教授)

17:10 休憩
17:20 総合討論：指定発言を予定
18:30 閉会予定

◆参加申込方法：
どなたでも参加できます(参加費無料)。ただし事前に参加申し込みが必要です(定員60名)。
氏名、所属を明記の上、下記のメールアドレスまでお申し込みください(8月27日締切)。
申込先：Eメール jinkanken@gmail.com 帝塚山大学 柳元和 宛 へお願いします。

本日のシンポジウムの目的は、教育現場における、問題解決型プロジェクトを知ることです。また問題解決のために必要なものは何かについてヒントを得ることです。アウトカム（求める成果）を共有する方法を探ってみましょう。（説明終）

最初の演者は畿央大学 教育学部 教授 西端律子氏で、「コーディネータとして：特別支援教育×ICT をめざして」の報告を受けた。特別支援教育においてこそ電子機器が活用できるはずであるとの思いから本プロジェクトは出発している。現場に行ける学生スタッフ探しから始まり、現場スタッフとのミーティングの積み重ねや職員研修会への参加など、準備を重ねて来られた。そして実際に子ども達がどう変化して行くのかを見ることに主眼を置き、苦手な音や色を変更するという地道な取り組みを繰り返しながら今日に至っている。本プロジェクトを通じて、発達水準に合わせた教材選びにエビデンスが生まれること、教材紹介シートにエビデンスが蓄積されて来ていること、操作の複雑さと発達段階のマッチングが可能になりつつあることなどが紹介された。

第2演者は奈良県立奈良養護学校 教諭 高橋浩氏で、「現場教諭として：児童・生徒の活性化は、どのように実現されたか」を報告された。映像の紹介を中心に、子ども達が緊張を解き、目標に手を伸ばせるようになる過程が具体的に示された。そして子どもの活性化が教員の活性化につながり、それが教師集団の活性化にもつながっていると述べられた。

第3演者は大阪電気通信大学 人間科学研究センター 准教授 森石峰一氏である。「機器開発担当として：肢体不自由のある児童・生徒に寄り添う ICT」を報告された。森石氏の出発点は「キーボードやマウスは本当に便利なのか？」という疑問にある。氏はキーボードと画面で疲れてしまう生徒や、エンターキーを叩けない生徒を数多く見て来られ、「これでは達成感を得られるはずがない」と思われたそうである。しかし肢体不自由者対応の機器は高価すぎて実用的でない。そこで右・左など単純な動作で動かせる入力装置を開発することを決意された。その留意点は、1) 1度に1回しか動かないこと。2) 力をかけなくても良いこと。3) 特別なインターフェースが要らないこと。4) 安価で個人で購入できること。であった。2015年2月7日に開発したセンサーを用いて生徒が独力でプレゼンテーションを完遂した。手応えを感じているとのことであった。今後は普及が課題である。

第4演者は東大阪大学 情報教育センター長 太田和志氏で、「データベース担当者として：『暗黙知から形式知へ』 日本中での共有化への野望」を報告された。データベース開発に当たって問われていたこととして、1) 資金不足のため既存の無償ソフトウェアを用いる。2) 特別な知識が不要で、整理方法が直感的に分かりやすいこと。3) カスタマイズは最小限にし、今後の変更に対応する。4) 発達段階に応じた整理が容易で、直感的に使いやすいこと。5) アップロードしやすいこと。6) SNS が活用できること。等であった。これらの内、

1-4 はほぼ達成されており、5-6 に挑戦するとのことである。また今後の課題として、ア) 独立組織としての育成。イ) 地域ごとのグループ化も模索。ウ) 検索方法の緻密化。エ) 発達水準等での階層化。オ) 全文検索で用いるキーワードの選定。などがあがっていた。総じてデータベースの改良で教材の共有化・改良の促進が期待できるとのことであった。

その後の討論では、鴨谷真知子氏から「デザインは引き算」の発言を受けた。情報が正確に伝わるように整理するためには、「情報を羅列し要らないものを引く。残ったものをグループ化し説明する文章を圧縮する。重要度で整理し、目立たせる優先度を決定する。」という定石がある。目立たせるものはシンプルでクリア、ボールドが基本であるとのことであった。

続いて竹中章勝氏から「アクティブ・ラーニング」に関する発言を受けた。我々は文字では興味喚起、学習動機付けが難しい世代を相手にしている。一般教室にも10数%特別な支援を必要とする生徒達がいる。そのような人達が自分でノートを書けるようになる意味は何か深く考える必要がある。パッシブではなくアクティブな学びを促すために、必ずしもディスカッションは絶対条件でない。文字を読むのが嫌な人々にノートを書かせるトレーニングが必要とされており、ノートテイクの圧迫感を軽減する工夫が必要不可欠であると述べられた。

総じて、教育情報学は発展過程にあり、多分野の協力が得られつつあるが、学術的整備はこれからであり、本シンポジウム参加者の交流・研鑽を続けていくことを確認した。

訃報

第4演者であり、また特別支援教育プロジェクトの調整に奔走しておられた太田和志先生が2015年9月に急逝されました。謹んで哀悼の辞を捧げます。